一流

結城昌治

逆流

結城昌治

昭和五十六年九月三十日　初版発行

発行者　角川春樹
発行所　角川書店
東京都千代田区富士見二―十三
〈電〉〇三（二六五）七一一一　大代表
〈振〉東京三―一九五二〇八　〈郵〉一〇二

旭印刷・大口製本

Printed in Japan　落丁・乱丁本はお取替えいたします
0093-872318-0946(0)

逆

流

装丁・篠田昌三

此为试读,需要完整PDF请访问: www.ertongboo

第一部

1

電話で女の声を聞いたとき、吉岡はだれの声かすぐには思い出せなかった。
「吉岡さん、いらっしゃいますでしょうか」
ていねいな言葉づかいだった。
「わたしが吉岡ですが――」
「やっぱり吉岡さんね。すぐ分かったわ」
女は馴れ馴れしくなった。
その口ぶりで、吉岡も心あたりがついた。すこしハスキーな声にも憶えがあった。しかし、まさかという気がしていた。
「あたしよ。まだ思い出せないかしら」
「小川くんか」
電話は交換機によるダイヤルイン式（直通）だから、吉岡の机の上の電話機に直接かかってくる。吉岡は声を低くしたが、相手の声はほかの者に聞かれる気づかいがなかった。
「あぁよかった。もう忘れられてるかと思ったわ」
小川れい子である。色白で、顎の線がきれいな女だった。
「忘れやしないさ。でも、ずいぶん久しぶりじゃないか」
「近くまできたら急になつかしくなって、ちょっと声を聞きたくなったの」
「相変わらず気まぐれだな」

「いけなかったかしら」
「そんなことはない。ぼくもなつかしいよ。元気なのかい」
「そうね。病気もしないし、べつに変わったこともないわ。吉岡さんもお元気のようね」
「まあまあ、ってとこかな。相変わらず仕事に追われている」
「いまもお忙しい最中なの」
「いや、会議が終わって、ちょうど席へ戻ったところだった」
「もしお仕事の都合がついたら、帰りにお会いできないかしら。コーヒーを飲むだけでいいわ。声を聞いたら、やはり会いたくなっちゃった」
「そうだな——」
吉岡は気持ちが動いた。仕事の予定はないが、ひさびさにマージャンをやる約束があった。しかし、マージャンのメンバーなら代わりを見つけることができる。マージャン好きな連中は社内にいくらでもいるのだ。といってれい子とよりを戻すつもりはないが、どんなふうに変わったか、あるいは少しも変わらないか、現在の生活についても聞いてみたいし、せっかく電話をくれたのに断ってしまうのも不人情な気がした。コーヒーを飲むくらいなら、やましいことをするわけでもない。それに、彼女の声がなつかしく、彼自身会ってみたくなったのも確かだった。誘われなければ、彼のほうから誘ったかもしれないのである。
「それじゃコーヒーでも飲もうか。まだ少し仕事が残ってるけど、五時半には出られる。場所はどこがいいかな」
「アムスはどうかしら」
れい子は喫茶店の名を言った。

「わかった。六時までにゆく」

吉岡は電話を切った。

アムスは銀座六丁目の裏通りにあった。れい子に会うとき何度も利用した喫茶店だが、一階も二階も広くていつも混んでいるから、店員に顔をおぼえられることはなさそうだし、かりに会社の同僚に見られた場合でも、偶然れい子に会ったふりをしても不自然ではなかった。小さな店でこっそり会うより、吉岡にとってはアムスのような店のほうが安心だったのである。

吉岡は受話器を置くと、タバコに火をつけた。やめようと思いながら、どうしてもやめられないでいるタバコだった。

――意思が弱いのね。

れい子にそう言われたことがある。父を肺ガンで亡くしたという彼女は、くどいほど吉岡を禁煙させようとしていた。

しかし、もちろんそんなことが別れる理由になったのではない。

あれから何年経つだろうか。

吉岡はふっと考えた。三年くらいか。いや、もっと前かもしれない。吉岡はまだ係長だった。娘の由利がしきりにませた口をきいて、まわらない舌で「お父さんは好きなひとがいるの」と聞かれ、どきっとしたことを憶えている。意味も分からないまま聞いたにちがいないので、妻の敏江はおかしそうに笑っていたし、吉岡も笑ってごまかしたけれど――。

「滝さん」

吉岡は通りかかった滝口を呼び止めた。営業部の課長補佐をしている男で、滝口と呼ぶのが面倒なわけではないが、親しい同僚たちは「滝さん」と略していた。

「きょうのマージャン、都合がわるくなってしまったんだ。代わりを見つけてくれないか」
「なんだ、あんたが言い出したんじゃないか」
「この次はかならず入れてもらう。おれが代わりを見つけてもいいが、そのせいで滝さんが負けたなんて言われると困るからな」
「勝手なことを言ってくれるよ、まったく」
「一人くらい見つかるだろう」
「まあね、都合がわるくなったんじゃ仕様がない。誘われても断るほうが多いのに、めずらしいと思ってたんだ」
滝口は不機嫌な顔で行ってしまった。吉岡と同年生まれの四十一歳だが、髪がうすいので年長に見られがちだった。
年齢といえば、吉岡よりちょうど一まわり下のれい子は二十九歳になるはずだ。電話では詳しい話ができなかったが、たぶん結婚して、子供もいるにちがいない。別れるときは可哀そうな気がしたけれど、結局はそれが彼女のためで、吉岡自身のためにもよかったのである。しかしことによると、彼女は独身のままでいるのではないか。
吉岡は机に向かったが、何となく落ち着かなかった。

吉岡は六時きっかりにアムスの自動ドアの前に立った。早くも遅くもなく、約束の時間を守るのは彼の几帳面な性格をあらわしている。
静かな音楽が店内を流れていた。会社帰りの待ち合わせに利用する客が多いのか、夕方はとくに混んでいる店だった。

吉岡は社を出るころから浮き浮きした気分になり、気をつけないとまたれい子が好きになってしまいそうな予感がして、その予感を愉しんでいた。

れい子は二階の奥のほうの席にいた。

しかし、はじめはれい子がいることに気づかなかった。以前はほとんど化粧をしなかったのに、やや濃い目の化粧をして、髪を染め、服装も派手だった。彼女の笑顔で気づいたのである。

「しばらく――」

吉岡は腰を下ろして言った。

「ほんとにしばらくね。電話をしたとき、断られるかと思ってたわ」

「ぼくはそんな冷たい男じゃない。どうしているか、ずっと気になっていた」

「うれしいわ、そう言っていただけると」

「こんな所でぼくと会っていて、ご主人に見られたらまずいんじゃないかな」

「平気よ。結婚なんかしてないわ」

「なぜ」

「縁がないのね」

「意外だな。きみは前よりきれいになった」

「吉岡さんはお世辞がうまくなったわ」

「お世辞じゃない。ぐっときれいになって、見違えたくらいさ」

確かにお世辞ではなかった。かつての魅力とは違うが、成熟した女の魅力があった。

「きれいに見えるとしたら、お化粧のせいね。あたしはもう二十九よ。おばちゃんだわ」

「自分でそういう言い方をしちゃいけないな。きみはまだ二十四、五にしか見えない。結婚しない

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook

で、会社は辞めてしまったし、家にじっとしていたわけでもないと思うけどな」
「じっとしていたようなものじゃないかしら。このごろは母も体が弱くなったわ」
れい子は母と二人暮らしだった。吉岡はその母に会ったことがないが、れい子の話によると、やかましそうな母親だった。
れい子はハンドバッグからタバコを出した。そして唇の端にくわえると、高価な外国製のライターで火をつけた。以前は喫まなかったタバコである。吉岡はそのとき気づいたが、彼女はオレンジ色のマニキュアをしていた。やはり以前はしていなかったマニキュアだった。
「きみは、いまも家にじっとしているだけかい」
吉岡は聞かずにいられなかった。
「働かなければ暮らしていけないわ」
れい子はタバコをうまそうに吸って、投げやりな口調で言った。
聞くまでもない返事だった。れい子が金持ちの娘ではないくらいのことは、吉岡も以前から知っていた。
「すると、会社かどこかへ勤めてるのか」
「どうかしら」
れい子はいたずらっぽい笑いをふくんだ眼をして、細い首をひょいとかたむけた。気をもたせるようなときの癖である。
かつての吉岡は、そういう彼女のしぐさを可愛らしいと思っていた。しかし、今は気になるしぐさだった。
ボーイがきたので、吉岡はコーヒーを注文した。先にきていたれい子は、すでにコーヒーを半分ほ

ど飲んでいた。
「あたしのことより、吉岡さんは総務の課長さんになったそうね。おめでとう。あたしが思っていたとおりだわ。吉岡さんはきっとえらくなると思っていた」
「冗談じゃない。ぼくが課長になったのは運がよかっただけさ。運がよかったなんて言っちゃいけないが、前任者の課長が体をこわして長期療養が必要ということになり、その穴埋めに選ばれたんだ。さもなければ、まだ課長になれなかったね」
「でも、選ばれたというのは運だけじゃないわ。将来を見込まれたのよ」
「そうは思えないな。仕事がふえるばかりで参っている」
「すこし太ったし、とても張り切っているみたい」
「太ったのは中年太りじゃないか。この腹を見てくれよ。まさに中年太りだ」
「貫禄がでてきたわ」
「ぼくが課長になったなんて、だれに聞いたんだい」
「滝口さん」
「滝口に？」
「六本木のお寿司屋さんで偶然会ったのよ。滝口さんはお仕事の関係らしい人たちといっしょで、あたしもつれがいたから、ちょっとしか話せなかった。あたしを憶えていてくれたわ」
意外だった。毎日のように顔が合うのに、滝口はれい子に会ったことをひとことも言わなかった。
もっとも、滝口は吉岡とれい子の仲を知らないはずだから、わざわざ言う必要もなかったにちがいないが――。
「ぼくの机の電話番号も滝口に聞いたのか」

「いえ、ある人よ」
「ある人って？」
「気になるかしら」
「そんなことはないけど」
「受付で聞いただけよ。すぐ教えてくれたわ」
れい子はおかしそうに笑いを浮かべ、話を変えた。
「由利ちゃん、大きくなったでしょうね」
れい子は由利を見たことがあるのだ。会社の運動会のとき、まだヨチヨチ歩きの由利を妻の敏江がつれてきたのだ。そのとき、れい子は妻の顔も見ている。そして「きれいなおくさまね」と言っていた。
結婚する前の敏江は、吉岡の友人の妹がやっているミックルスというジーンズ・ショップにいた。友人の妹と敏江が大学の同級生で、暇つぶしと面白半分で手伝っていたらしかった。吉岡が初めて敏江に会ったのはミックルスの開店祝いに呼ばれたときだが、整った顔立ちが冷たくて近づきにくいという印象だった。
しかし、近づきにくいという思いは近づきたいという気持ちの裏返しだった。店は原宿にあったが、吉岡は仕事で通りかかったふりをしてミックルスへ寄り、そのたびにGパンやTシャツを買った。敏江も最初から吉岡に好意を持っていたようで、やがて外で待ち合わせるようになると、二人の仲は急速に発展した。吉岡が三十歳、敏江は二十三歳だった。ホテルの結婚式場で式を挙げ、新婚旅行は敏江の希望でグアム島へ行った。
だが、夫婦の仲がしっくりいっていたのは三年くらいだった。婚約中は甘い蜜を吸っているような

夢のなかにいるので、結婚という現実との間に落差があることは吉岡も予期しないではなかった。落差があったにしても、そんなものは愛情が消してくれると思っていた。ところが、敏江は彼が考えていた女とちがって、勝ち気で自尊心が強く、ばかばかしくなるほど世間体を気にした。吉岡の服装にいちいち口をはさむのも世間体のためだし、間違ったことをしても素直に「すみません」と言うことができない女だった。病気がちで神経質になっていたせいがあるかもしれないが、とにかくジーンズが似合うと思ったのが錯覚で、見栄っぱりな女だったのである。

それでも、五年目に由利が生まれると敏江は別人のように明るくなり、吉岡も早く帰宅して赤ん坊の顔を見るのが愉しみだった。

これでようやく家庭らしくなった。

吉岡は一安心した。

敏江はもう吉岡の服装を注意したりしなくなって、その代わり唯一の生き甲斐を得たように育児に熱中し、吉岡は仕事に追われていた。

どこの家庭もこんなものかもしれない。

吉岡はそう思って自分を納得させた。

しかし、小川れい子と深い仲になったのはそういう思いに慣れたころだった。吉岡自身が気づかないでいた心の奥の空白な部分に、彼女はあたたかい風のように入ってきたのである。もともと課はちがうが同じ会社だから知ってはいたけれど、吉岡はたちまち彼女の魅力にひかれた。それは妻に求められないやさしさと、みずみずしい肌と愛らしさだった。

「由利は五歳だよ。来月の誕生日で六歳になる。来年は小学校さ」

「早いものね。あれから四年経つわ」

れい子はぽつんと言った。
「四年？　そんなに経つかな」
吉岡は聞き返した。
「まる四年よ。あれは四年前の九月、もう十月末だわ」
れい子はコーヒーの残りを飲みほし、またタバコに火をつけた。
彼女が「あれ」というのは子供を堕ろした日のことで、聞き返すまでもなかった。あの日のことなら、吉岡もよく憶えている。ずいぶん待たされたが、どんなにほっとしたか知れやしない。
しかし、とうに過ぎ去ったことだった。れい子が電話をかけてこなければ、ほとんど忘れていたことである。四年経つというが、確かにそれくらいは経つかもしれない。
「ところで、いまの勤めはどういうとこなの」
吉岡は話を戻した。
「この近くよ」
「近くって？」
「分からないかしら」
「――――？」
吉岡は考えるふりをした。派手な服装や化粧で大体の見当はついたが、分からないふりをしてやることが礼儀だと思った。ひとめで分かったと言えば傷つくにちがいなかった。もちろん、彼女が現在の仕事に積極的で、成功しているなら余計な心配だろうけれど。
「カロンというクラブに勤めてるわ。クラブといってもバーと同じね。高いお店だし、お客さんは社用ばかりよ。だから、吉岡さんに来てくださいなんて言うつもりはないわ」

「全然知らなかったな」
「おどろいた？」
「うん」
「本当は知られたくなかったわ」
「滝口は知ってるのか」
「銀座にいると言っただけ。お店の名は教えなかった」
「いつごろから勤めてるの」
「一年半になるわ。初めは厭だったけど、すっかり慣れたみたい。あたしって、どんな水にも溶けやすいのかしら。お酒も飲めるようになったし、自分でもふしぎに思ってるの」
吉岡と付き合っていたころのれい子はコップ一杯のビールがようやくだった。すぐに顔がバラ色に染まって、胸がドキドキすると言っていた。
「すると、店へ出る時間じゃないのか」
「お店は遅刻したっていいのよ。遅くなるかもしれないって電話をしておいたし、どうせまだお客さんがくる時間じゃないわ。お店には顔だけ出して、いつもならラーメン屋さんにいるころね」
「まず腹ごしらえか」
「そう」
れい子は愉しそうに笑った。
その笑顔を見て、吉岡は食事に誘わなければわるいような気がした。彼女は店を遅刻した上、食事の時間をつぶしているのだ。それに、四年ぶりで会ったのにコーヒーだけで別れてしまうのも素っ気ないと思った。たまには早く帰って娘と遊んでやりたいが、妻のほうは待っているわけでない。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook